

自分は何を願っているのか

マルコによる福音 10:35-45

(そのとき、)ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが。」イエスが、「何をしてほしいのか」と言われると、二人は言った。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか。」彼らが、「できます」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる。しかし、わたしの右や左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、定められた人々に許されるのだ。」ほかの十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めた。そこで、イエスは(十二人)を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人々の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

説教

きょうの福音は二つの話があります。茶目っ気をだしてタイトルをつけてみると、ひとつは「右大臣、左大臣」ふたつは「身代金」です。お堅くいえば
1) 弟子たちの無理解(イエスのことをわかっていない十二弟子) 2) イエスの目的となるでしょうか。

＜右大臣、左大臣（弟子の無理解）＞

最初の話はヤコブとヨハネが抜け駆けし、栄光の暁には（イエスの目的達成時には）自分たちを重要ポストにして欲しいと願っていました。これはマタイ福音書（20:20以下）では母親が願ったという話になっています。（マタイとしてはあまり弟子たちの悪口を書きたくなかったので本人ではなく母親にしたという説もあります）

この申し出に対してイエスは「杯と洗礼」で返答します。

杯は苦しみ、受難のたとえでしょう。洗礼とは十字架の死の比喻になっています。

このイエスの問いかけ、受難を受ける覚悟はあるか、十字架の洗礼を受けるか、二人は「できます」と答えます、これはそのとおりで、このままイエスに付き従っていさえすればできるので間違っただけではありません、彼らは嘘をいっていません。イエスも彼らの答えに対して「そのとおり」と返事をします。しかしイエスのおもいは彼らのおもいをはるかに超えたところにあります。続いてイエスは右大臣、左大臣を決めるのはわたしではないと、控えめに、しかし、はっきり伝えます。いったいイエスは神の子なのか、それとも人間イエスなのか？神の子ならば人事権は当然イエスにはあるだろう、でも決められないという返答からすると神の子ではないのか、なんて考えもでてきますが、ここではそんなことが議論になっているわけではないでしょう。一番大切なことがわかっているのか、いないのか、そこがポイントになっています。

イエスの栄光のあとの事をヤコブとヨハネは彼らなりに考えてポストを願い出たのでしょう。しかし、それは重要なことではないとイエスは退けています。では重要なこととはなにか。まだ明言はされていません。

ほかの10人はこの話を聞いて「腹を立て」た、とありますが、抜け駆けが許せなかったから腹たった、自分たちもポストが欲しいわけです。ようはほ

かの10人も同じ穴のムジナです。

続きを読み進めましょう。

<身代金>

イエスは12人に向かって二つのことを告げます。

一つは権力批判、もう一つはイエスの目的です。

イエスの権力に対する姿勢は最初から最期まで一貫しています。徹底的な否定です。きょうの福音には「異邦人の間」という言い方で外国の権力（イエスの時代ではローマ帝国）批判のかたちで述べられますが、今までの福音の記述からすれば、ユダヤ国内でも同じようなことがあり、当然それも含まれているとおもいます。イエスはさまざまな形で権力を否定してきました。それは右のほほを打たれたら左のほほを出せ、だったり、汝の敵を愛せ、7の7倍許しなさい、などなどの非暴力のかたちです。ここでは「偉くなりたいものは仕える者になれ」「上になりたい者は僕になれ」といいます。これはおなじみの「後のものが先になり、先のが後になる」という教えのバリエーションです。

そして続けてイエスの目的、なんで神が人の子となって地上世界に来たのか、それをついにはっきりと告げられます。

多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。10:45b

これは贖罪というキリスト教の中でも重要な教えとなっています。イエスが十字架に架かり死ぬこと、死刑になることは、全人類の罪のいけにえとしてのイエスの死を意味しています。つまりイエスお一人が死んで罪を償うことが全人類の罪の償いとなる、ご自分の命をささげるのは「多くの人の身代金」としてだ、これが贖罪なのだ、とキリスト教は伝統的に解釈しています。イエスの目的は、全人類のためにいけにえとなって十字架で刑死することだ、とご本人の口からはっきりといわれました。

だから、わたしたちの罪は許された、イエスの十字架はわたしたちの救いだ、

これでいいわけでこれ以上のことは必要ないわけです。何も足さない、何も引かない、十字架とはそういうものです。

確かに、そのとおりですが唐突な感じは残ります。右大臣、左大臣問題に続いてイエスの地上での目的が明示されます。そして、イエスの目的は十字架なのだから、それさえわかればいいのだ、それ以外は全部よけいなこと？だ、それでいいの、イエスってそれだけ、十字架だけのお方なの？

きょうの福音が教えていること、書いてある言葉「杯、洗礼、身代金、命を奉げる」から見ていくとすべてが十字架を指し示し、そこに集中していくようになります。じゃ、十字架がすべてなのか、わたしにはそうは思えません、十字架もふくめてイエスは福音書の中に証言された全部がイエスなのだとおもいます。そして福音書だけかというと聖書全体がイエスを証言しているという考えも成り立ちますし、それだけではなくイエスの伝承も含むのだというカトリックの考え方にも理はあります。でも文書 = 聖書以外もイエスを証言しているとなると、どこまでも範囲は広がっていきます。どこまでいけばいいの、どこまでもどこまでもなのって途方にくれるというか不安にもなります。しかし、それがイエス、それでこそイエスなのではないでしょうか。

「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか。」彼らが、「できます」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる。しかし、わたしの右や左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、定められた人々に許されるのだ。」 10:38-40

わたしたちは何を願っているのでしょうか、そしてその願いはどのようにかなうのでしょうか。イエスのことばに聞き入ると同時にわたしたち自身の心にも聞いてみる必要があります。わたしたちはけっして、イエスの右の座を求めているわけではないのですから。じゃ、いったいなにを願っているのでしょ

うか。お一人お一人、顧みてください。
